

近藤 卓さん

(東海大学文学部心理・社会学科教授)

子どもたちに「いのちの大切さ」をどう伝えるか

時に若い殺人犯は「誰でもいいから殺したかった」と言う。他者のいのちの軽視に戦慄する。そこに近藤さんは、子どもや若者たちの「基本的自尊感情」の希薄さを見てとる。自らのいのちも大切じゃない、ましてや他人のいのちなど……。いのち観の危機をどうしたらいいのか。

存在に確信が持てない子どもたち

——約三十年にわたって中高生のスクールカウンセラーをしてこられました。その間の子どもたちの変化は実感されますか？

その質問はよく受けるのですが、個人的にはあまり変わったという印象はありません。三十年前、三十二歳でカウンセラーを始めたとき、自分を含め、私が知っているそれまでの中高生の姿と、目の前の中高生の姿に大きなギャップを感じて衝撃を受けたのですが、

そこからはほとんど変わっていないと感じます。

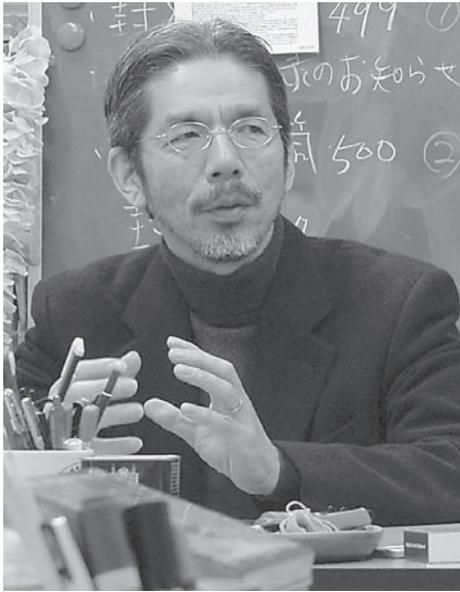
——受けた衝撃とはどのような？

私の感覚からすれば、実に他愛のないことで「死んでしまいたい」とか「生きるのが嫌になった」と口にする子どもが少なくなかったのです。彼らにとってはたしかに深刻な事態なのですが、それにしても死ぬか生きるかの基準が低くなっているのだということを感じ、ショックを受けました。

ある女子生徒の話ですが、「毎朝ホームから飛び込んで電車に轢かれて死んでしまいたいと思う。それぐらい学校に行くのが嫌です」と泣きながら語る。相当

深刻な悩みなのだろうと身構えたのですが、死にたい理由は昼休みに一緒にご飯を食べてくれる仲間がいな
いというものでした。

私や私たちの世代の感覚からすれば、仲間と昼ご飯
を食べること、あるいは食べないことと死ぬことには
大きな距離があると思うのですが、彼女にとつては非
常に近い距離になっている。こうした理由で死を口に



●こんどう・たく 一九四八年東京都生まれ。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学。ロンドン大学客員研究員を経て現職。日本学校メンタルヘルズ学管理
専攻、子どもといのちの教育研究会会長。近著に『死んだ
金魚をトイレに流すな』（集英社新書）がある。

する子どもたちがいたことに大きな衝撃を受けました。
その後、さまざまな子どもたちと面接を続け、最終
的に行き着いたのは、彼らが自分の存在に対する根本
的な確信が持てないということでした。「自分
は今のままでいいんだ」と、ありのままの自分を受け
容れることができずにいる。ことばにできないような
存在の不安を抱えていて、その不安がささいなことで
一気に「死にたい」とエスカレートする。きつかけは、
友達と昼ご飯を食べられないことだったり、失恋だつ
たり、進路の悩みだったりするのです。

「自分は今のままでいいんだ」と思い、「自分はこれ
以上でも以下でもない」「自分は自分なんだ」と自然
に思うことができる感情——これを私は「基本的自尊
感情」と名づけたのですが、この「基本的自尊感情」
が備わっていないければ自分を心から大切にしようと
思うことはできません。それがなければ、自分のいのち
も、さらには他者のいのちも大切に思うことはできな
い。この「基本的自尊感情」を持てずにいる子どもた
ちが、すでに三十年前からいたということです。

つまり、いのちの大切さを実感できない子どもが
出てきたのは昨日今日始まったことではない。いのちを